ミラノ通信 34号

発行日　2024年7月15日
発行者 富山・ミラノデザイン交流倶楽部
高岡市オフィスパーク 5
公益社団法人富山県デザイン協会内
TEL. 0766-63-7140

執筆　池田美雪
ミラノ在住デザイナー

ミラノサローネ・スペシャル （前編）

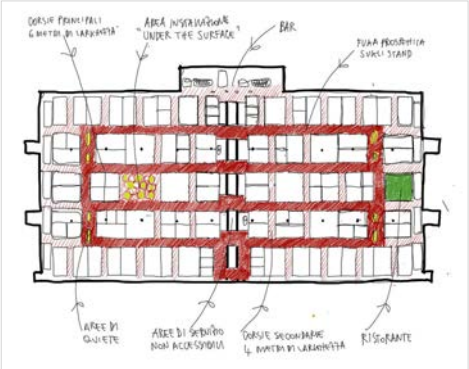
第62回ミラノサローネ国際家具見本市

2024年4月16日から21日までの6日間、ロー・フィエラミラノにて、第62回ミラノサローネ国際家具見本市（以下、ミラノサローネ）が開催されました。今年は、サローネ国際家具見本市、サローネ国際インテリア小物見本市、Workplace3.0、S.Project、サローネサテリテへ、隔年開催のEuroCucina（サローネ国際キッチン見本市）、FTK-テクノロジー・フォー・ザ・キッチンとサローネ国際バスルーム見本市が加わり、例年以上に密度が高く、広がりのある展示が繰り広げられました。

昨年に引き続きすべてのパビリオンをワンフロア（地上階）のみで構成し、総面積17万4,457平方メートルの展示空間へ、35カ国から1950（出展企業1350社とサローネサテリテのデザイナー600人）が出展、来場者数は昨年比20.2%増の37万824人（その内の53.9%は国外からの来場者）を記録し、中でも業界関係者数の伸びは28.6%にも達しました。

© Salone del Mobile.Milano
開催初日のエントランスの風景。

会場構成については昨年の経験を基に、EuroCucinaとサローネ国際バスルーム見本市の空間プランを建築事務所Lombardini22が手がけ、来場者の体験価値を高めると共に、出展社の公平な認知度を確保するためにレイアウトとルートが最適化されました。さらに、文化的スペースやリラックススペースなども経路へリズムを与えるよう配置され、従来の見本市にはないゆったりとした刺激的な都市型の空間が生まれました。今年は、本会場にて4つの文化イベントと、トリエンナーレ・ミュージアムにて、サローネサテリテ25周年を記念するエキシビジョン「Universo Satellite」が併催されました。



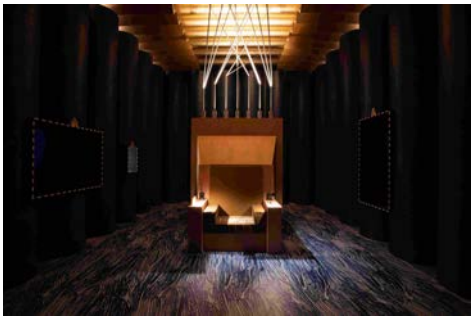
© Salone del Mobile.Milano
LOMBARDINI22による国際バスルーム見本市の平面プラン。

初日の会場の様子をこちらからご覧ください。
会場全体の風景を2分間にまとめたビデオをこちらからご覧ください。

「Interiors by David Lynch. A Thinking Room」 （David Lynchのインテリア 。考える部屋）

2月13日に行われた記者発表会の場で、David　Lynchのインスタレーションが紹介された瞬間、世界的に名の知れた映画監督が何故ミラノサローネに参加するのか、その脈絡が不思議に感じられました。が、このプロジェクトのキュレーターを務めた映画監督の友人である作家

Antonio Mondaは、その理由をこのように話してくれました「David Lynchは自分の手で家具を作ることがとても好きで、20年以上も前から舞台装置のための夢想的な家具を制作しています。彼にとってインテリアは映画の主人公の心の状態を映し出す、いわば独自の生命を持った登場人物なのです。」こうした思いがけないつながりを耳にして、ツイン・ピークスで幻想的な世界を描き出した監督が、ミラノサローネと関わりを持つのが至極当然のように感じられたのです。パビリオン5と7の狭間に、劇場を彷彿させるベルベットの真紅のカーテンに囲まれたシンメトリーな二つの空間が設置され、カーテンをくぐり抜けるとブルーに包まれた静寂な空間が現れます。その中心にはスクリーンを前に、どっしりと構える彫刻的な金色の椅子、椅子の脇には、心に浮かんだ何かを描けるように画材が置かれています。壁面にはブルーの円柱が波打ち、金色の蛇腹と金属管に覆われた天井は間接照明によりほのかな光を放ちます。無意識層を揺さぶるこの空間に身を置き、来場者たちは、沈黙と孤独の中で心と精神を落ち着かせ、ひいては偏見や推論を一旦手放すことで、喧騒に包まれる見本市の空間展示を、より意識的に深く感じとることができるように準備を整える、というコンセプトです。



© Salone del Mobile.Milano

幻想的なInteriors by David Lynch. A Thinking Roomの空間。

Antonio MondaによるDavid Lynchへのインタビュー（英語）をこちらからご覧ください。

「Under the Surface」

サローネ国際バスルーム見本市をより深く理解するために企画された、没入型のインスタレーション「Under the Surface 」は、会場のほぼ真ん中に設置され、遠くからもゆらゆらと青く揺れる多面的な外観を持つレリーフが見てとれます。私たちの生命に不可欠な水資源の責任ある使用と、それを実現する製品の背後に隠された最新テクノロジーを、さまざまな科学的データを用いて詩的な手法で視覚化するプロジェクトです。このインスタレーションは、データの可視化デザインを手がけるAccurat、イノベーションを介してデザインを手がけるDesign Group Italia、そしてデザイナーEmilio Ponzi（Salotto.NYC）の協働によって実現され、倫理や持続可能性、テクノロジーだけでなく、水の力や魅力も伝えます。かつて海の下に沈んだとされる島、アトランティスをモチーフにデザインされた島々の周囲では、3つの異なるエリアで水の消費に関する情報が投影されます。その一つは、一人当たりの淡水の利用可能性に関して、国と地域ごとにグループ化された1961年から2019年のデータを示すものです。島の間に足を踏み入れると、青い光と天井に映し出される水面の水の動きを模した映像により、あたかも海中を歩くような不思議な感覚に包まれます。島と島の間の回廊に設けられたニッチでは、データの視覚化、３Dプリントによる抽象的な海の風景、ホログラフィーの投影を活用し、バスルーム設備分野における最先端の技術、イノベーション、そして製造工程の進化が表現され、完成した製品を見るだけでは知り

© Salone del Mobile.Milano

海面下に沈む島々をイメージした、ブルーのインスタレーション「Under the Surface」。

得ないそれらの資源節約への貢献度が、来場者にも簡単に理解できる形で紹介されています。例えば、従来のシャワーは1分間に約15リットルの水を消費しますが、水へ空気を混入することで水の出力を減少しつつも水の流れを保証する技術によって、45%の節水を実現することができます。

サローネ国際バスルーム見本市をメインに紹介するビデオをこちらからご覧ください。

EuroCucinaの併催イベントとして**「All You Have Ever Wanted to Know About Food Design in six Performances**（6つのパフォーマンスでフードデザインの全てを知る）**」**も開催されました。EuroCucina会場の中央に設けられた大きな没入型スペースでは、独立系のフードマガジン6誌が、連日、世界中から集まったアーティストやシェフとともに、回復力の象徴、感情の源、プロジェクトの素材として称賛される食の現在と未来について、これまでにない斬新で独創的な考察を展開しました。食は、神話、哲学、文化、精神性、民間伝承であり、これらが保存され、継承され、再考されなければならない、という認識に基づいて、食が直面する課題や、食の分野がデザイン界にもたらす機会について議論を交わすことを主旨としたプログラムです。

EuroCucinaと併催イベントを紹介するビデオをこちらからご覧ください。

蓮池槇郎デザインの、ARAN cucine社のキッチンシステム「Sipario」。

© Salone del Mobile.Milano

EuroCucina会場で行われた、アメリカのフードマガジン『FAMILY STYLE』のイベントの様子。

サローネサテリテ - 1998年よりデザインを繋ぐ

1998年にスタートし、今年で25回目の開催となるサローネサテリテへ、32カ国から約600人の若手デザイナー、そして13カ国からデザイン学校・大学22校が、それぞれ独自の作品を携えて参加しました。会場入り口に展示されたグラフィックパネルには、ここに参加する学校が世界の全ての大陸からやって来ている事実が簡潔に示され、このイベントが若い才能の集まる世界で唯一の広場であることを裏付けていました。

これらの参加学校の中で興味をそそられた展示ブースは、メキシコのCEDIM-The School of Design。「ハーモニーの中のアルミニウム」のテーマを掲げ、ステーショナリーやチェス盤、キャンドルスタンドなど、再生可能な素材であるアルミニウムの可能性をさまざまなデザイン作品で表現しています。エコ素材でもう一つ新鮮に感じたのは、ドイツのデザイナーRania Elkallagのプロジェクト「shell homage」です。彼女は修士課程の卒業制作として、有毒化学物質を含まない廃棄物である卵とナッツの殻へバイオポリマーと天然フィラーを混ぜ合わせ、独自にバイオ素材を開発しました。インテリア製品やジュエリーなどへ代替え素材として使用でき、使用後は100%生分解されます。

CEDIM-The School of Designのアルミニウム・プロジェクト。

ceraLABのデジタル・セラミック作品。

生分解性素材、Shell homageの応用作品。

日本から参加する興味深い展示にも出会いました。

京都のPUBLIC SERVICEがリリースする「珈道 十職人-COFFEE CEREMONY&10 SHOKUNIN」は、日本に古くから伝わる茶道における世界観をコーヒー文化に当てはめ、十人の職人とともに新しい道具を作り出すプロジェクト。ブースには、茶道の文化をルーツに、日本の伝統工芸を活かしてコーヒー・セレモニーのために生まれた、美しい道具が整然と展示されていました。一つ一つのものづくりに個性豊かなストーリーがあり、これからもこのプロジェクトを進めていって欲しいと感じさせるコンセプトです。

「珈道 十職人」プロジェクトの作品。

東京を拠点に活動するSTUDIO POETIC CURIOSITYは、包括的で芸術的な感性で、見る人、使う人の心に届く詩的な作品を制作するユニットです。展示ブースの正面をベールのように覆う細い糸のパーティション「光をそそぐ」は、雲の隙間から差し込む日の光から着想を得たインスタレーション作品。立ち止まっていつまでも眺めていたいと思わせる、心惹かれるブースでした。

STUDIO POETIC CURIOSITYのブース

サローネサテリテの若手デザイナーの選出審査基準について、常々私が好感を持つ点は、新技術で制作された現代的な工芸作品を積極的に取り入れていることです。今年は、オーストリアのcera.LABが発表したセラミック作品が印象的でした。インスブルック大学で建築学を学び、セラミックに特化した二人は、素材、持続可能性、デジタルデザインを維持しながらより複雑な形状を作り出すことにチャレンジしています。自然素材と機械のシームレスな相互作用を生み出しながら、純粋な好奇心で工芸品とデジタルの境界を押し広げているデザイナーたちです。ブースに展示された、3Dプリンターとアナログ技術を組み合わせた実験的な形状の壺は、緻密な紋様の中に手の温もりを感じさせる作品でした。

第13回サローネサテリテ・アワード

第13回目を迎えるサローネサテリテ・アワードは、MoMA（ニューヨーク近代美術館）建築・デザイン部門のシニア・キュレーターPaola Antonelliを審査委員長に、業界のエキスパートたちが構成する審査委員会により受賞プロジェクトが選出され、開催2日目に授賞式が行われました。今年は賞状に加え、25周年を記念してアワードトロフィー「Riflettendo」が授与されました。ステンレスの鏡面仕上げをベースにデザインされたこの彫刻は、サローネサテリテに参加した経験を持つアーティストDaniele Bassoが、Bruno Munariの椅子「Singer」からインスピレーションを得て発案しました。

100点以上の応募作品の中から選出された4つの受賞プロジェクトからは、持続可能な考え方の視点に立った、製造プロセスと伝統のイノベーションが浮き彫りになります。

第1位を獲得したのは、中国人デザイナーZhen Bian（Studio Ololoo）が制作した照明器具「Deformation Under Pressure」。インフレータブルPVCと張力のあるアルミニウム構造を、実験的なアプローチで組み合わせた、その発想と実現力が大きく評価されました。

第2位には、イタリアのデザイナーFilippo Andrighettoのブックシェルフ「Veliero」が選ばれました。素材は木材のみ、そして、すべてのパーツがネジや接着剤を使用せずにはめ込みで組み立てられていること、この二つの特徴が評価されました。

第3位は、同じくイタリアのデザインスタジオEgoundesignが3Dプリンターで制作した真鍮製カップのセット「Voronoi」。製品そのものだけでなく、3Dプリンティングの新たな製造方法とその応用につながる研究努力が評価されました。

特別賞には、Creative Tunisiaに参加したデザイナー、MOHAMED ROMANI with CHEMS EDDINE MECHRI and AHMED BSSILAの照明器具「Fibra」が選ばれました。伝統的な素材が、シンプルな日用品としていかに生かされ、新しく生まれ変わることができるのかを実証し、さまざまな職人技に応用されうる研究である点が評価を得ました。

来年度、第63回ミラノサローネ国際家具見本市の開催は、4月8日から13日までです。

© Salone del Mobile.Milano

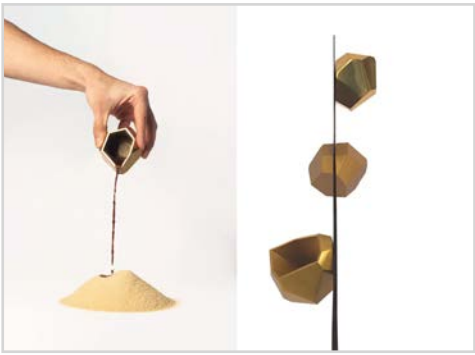
Daniele Bassoがデザインしたアワードトロフィー「Riflettendo」。

© Salone del Mobile.Milano

第1位を獲得した照明器具「Deformation Under Pressure」。

© Salone del Mobile.Milano

ブックシェルフ「Veliero」。



© Salone del Mobile.Milano

真鍮製カップのセット「Voronoi」。

次号は、ミラノサローネ・スペシャル（後編）として、ミラノ市内で開催されたフォーリサローネの模様をお伝えします。

執筆者 略歴

池田美雪 インテリアデザイナー
武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒
Istituto Europeo di Design 建築インテリア科卒

1994年よりミラノ在住 個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わったのち
2005年より クリエイティブ・コンサルティング会社（デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン、アプリ) の共同経営者として活動

デザイン・アートに関するプロジェクトコーディネイト、翻訳および通訳
mikeda.it